

第15回 大阪男声合唱团 定期演奏会

2015年7月19日(日)
開場 13:15 開演 14:00

第一生命ホール

主 催：大阪男声合唱团
後 援：大阪大学男声合唱团OB会

～ ご 挨拶 ～

本日は暑い盛りの日曜日にも拘らず、大阪男声合唱団の定期演奏会にご来場頂き、誠にありがとうございます。皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

大阪男声合唱団は大阪大学男声合唱団（阪大男声）のOBで組織していますが、2001年から毎年定期演奏会を開催しています。関東地区にも大勢のOBが居住しており、このOB達が定期演奏会の開始を機に東京支部を発足させ、第1回から大阪で行う定期演奏会に参加してきました。最初は少人数であった東京支部は次第に人数を増やして活動が定着し、支部単独でも演奏活動が出来るようになりました。その東京支部を足場にして、2007年から大阪男声の演奏会を東京でも開いてきました。

2012年から定期演奏会を大阪と東京で1年ごとに開催することになり、今年はその2回目になります。

一方、今回は大阪外国語大学グリークラブOB合唱団に賛助出演をして頂きますが、母体である大阪外国語大学と大阪大学が統合したので、OB合唱団も交流をすることになり、3年前から大阪、東京で合同演奏や賛助出演を進めています。その交流の成果もこの定期演奏会でご披露出来ることになりました。

本日のプログラムは、最初はシューベルトの男声合唱曲です。昔は阪大男声でドイツの合唱曲をよく歌っていたので、年配のOBには懐かしい曲です。指揮をするのは当団の若手の坂田裕二です。

次は東京支部が出来てからずっと東京で指導をしてきた甲和伸樹が指揮する「岬の墓」です。戦後の日本を代表する堀田善衛(小説家)と團伊玖磨(作曲家)が美しい情景に人生をシンボリックに表象しています。

後半の最初は、プロの音楽家で、発声など技術面の指導もして頂いている萩原寛明さんの指揮で、東日本大震災の被災地の情景を詠んだ星野富弘の詩に千原英喜が曲を付けた「明日へ続く道」です。高校のコンクールの課題曲で、年配者が多い団ですが若い声に挑戦しました。

最後は、パナソニック合唱団の指揮者をしている阪大男声のOBの本城正博が、多田武彦の「柳河風俗詩」で登場します。本城は2年前にやはり多田武彦の「富士山」で、60名余りのステージで皆さんに感動を与えましたが、今回は前回と同様に、この曲だけを歌うために集まったOBのほかに、大阪外国語大学OB合唱団のご参加も得て、ステージ一杯の80名を超す大人数で、九州柳河の風情をたっぷりご披露致します。

どうか最後までごゆっくりお聞き頂き、夏の午後の一服の清涼剤として頂ければ幸いです。ありがとうございます。今後とも大阪男声合唱団に変らぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2015年7月

大阪男声合唱団団長 子安一男

～ プログラム ～

I. 『シューベルト男声合唱作品集』 より

指揮：坂田 裕二 / ピアノ：武知 朋子

1. 夜 (Die Nacht)
2. 小夜啼鳥 (Die Nachtigall)
3. 菩提樹 (Der Lindenbaum)
4. 小さな村 (Das Dörfchen)

II. 男声合唱曲『岬の墓』

作詩：堀田 善衛 / 作曲：團 伊玖磨 / 編曲：福永 陽一郎

指揮：甲和 伸樹 / ピアノ：坂田 百合子

~~ 休 憩 ~~

III. 男声合唱組曲『明日へ続く道』

作詩：星野 富弘 / 作曲：千原 英喜

指揮：萩原 寛明 / ピアノ：武知 朋子

1. 君影草
2. もう一度
3. 悲しみの意味
4. 明日へ続く道

IV. 男声合唱組曲『柳河風俗詩』

作詩：北原 白秋 / 作曲：多田 武彦

指揮：本城 正博

1. 柳河
2. 紺屋のおろく
3. かきつばた
4. 梅雨の晴れ間

～ 曲目解説 ～

I. 『シューベルト男声合唱作品集』

「歌曲王」として知られるフランツ・ペーター・シューベルト（1797～1828）は、合唱・重唱曲にも佳品を生んでいます。多くは、独唱歌曲と同様、友人・知人のために書かれたものですが、人気を得たものは出版され、広く知られました。歌詞の大意を記します。

夜 (Die Nacht)： 1823年作。 詞は F.W.クルンマッヒャー。

何て美しい夜、親しみある静けさ、天上の安らぎ／ご覧、明るい星が、天の草原を散歩しながら、
私たちを眺める／静かに、蒼いかなたから
何て美しい夜、親しみある静けさ、天上の安らぎ／優しい春がひそやかに、大地の柔らかな膝に
近づき、銀の泉を苔で飾る／そして、この野原を花で（飾る）

小夜啼鳥 (Die Nachtigall)： 1821年以前の作。 詞は J.K.ウンガー。

小道の藪に隠れ、控えめに／小夜啼鳥が魔法の歌を始める／喜ばしい「まこと」の報いを歌う／
羽ばたきと渦巻く声で
膨らんだ胸から柔らかな声が滑り出る／感情の息、歓びの証し／聞くがいい、憧れのため息がいかに
消え行くか／愛らしい魂の響きが鳴り渡る時
友よ、もはや天の歌は止んだ／月の光が闇を退けたので／喜ばしい痛みが穏やかに流れ込んで来る／
音の翼から、私たちの感じやすい心に

菩提樹 (Der Lindenbaum)： 1827年作の歌曲集「冬の旅」第5曲。 詞は W.ミュラー。

大阪大学男声合唱団第9回定期演奏会（1961年）で演奏された編曲版です。

（当時、現役で歌った団員が8名おります。）

村外れの泉の辺に／菩提樹がある／その陰でみたものだ／甘い夢を何度も／その幹に刻んだ／
たくさんの愛の言葉を／嬉しいにつけ悲しいにつけ／思いはそこへ戻る
今日の夜更け／そこを通り過ぎた／真っ暗な中だけど／目を閉じないではいられない／
すると、枝がざわめいた／呼びかけるみたいに／ここへお出で、ほっとするから
冷たい風が吹きつける／顔にじかに／帽子を飛ばされたが／振り返りもしなかった／
もうずいぶん遠くまで来たが／まだ、ざわめきが聞こえる／ここならほっとできるよ

小さな村 (Das Dörfchen)： 1817年作。 詞は G.A.ビュルガー。

大好きな私の小さな村／こんなに美しい景色は／他のどこにも見られはしない
麦畑と緑の草地が／青々とした森を区切る／あそこの高い所に牧場／そしてその近くに／
寛げるわが家
大好きな、小さな隠れ家／そこで暮らしていると／喜びに満たされる／
榆と葡萄の緑の織物に覆われて
褐色の岩の割れ目をりんぼくが飾り／青空にポプラがそよぐ／
銀に輝く小石の上を／明るいせせらぎが穏やかに流れる／しだれる枝の下をおずおずと
水鏡に映るのは／子羊が行く緑の丘／岸の藪／底には魚／どじょうが滑って行く／真珠の泡
速い、速い／沈み、浮き／またも水面に
何という歓び！／時に移ろうことなくいつまでも／新たな血と朗らかな勇気を／私に与えておくれ

（坂田 裕二）

II.『岬の墓』

『岬の墓』は、堀田善衛が1963年の夏から秋にかけて蓼科高原にて書き下ろした詩に、團伊玖磨が混声合唱とピアノのために作曲し、八丈島の別荘の書斎で完成した作品です。同年11月には、第18回芸術祭合唱部門で、芸術祭賞・文部大臣賞を受けています。男声合唱版については、福永陽一郎が編曲を行ない、1975年5月に早稲田大学グリークラブが初演しています。

團伊玖磨（1924～2001年）は、日本を代表するクラシック音楽の作曲家の一人で、代表作「夕鶴」をはじめとする数々のオペラ、管弦楽曲、吹奏楽曲の創作のかたわら、歌曲・童謡・合唱曲の分野でも数々の有名な作品を残しています。また1964年以来「アサヒグラフ」に36年間連載されたエッセイ「パイプのけむり」の著者としても知られています。

堀田善衛（1918～1998年）は、1952年の芥川賞など数々の文学賞を受賞している小説家・評論家です。上海において文化人の立場で日中戦争や中国の国共内戦などを体験したことから、国際的な視野を持つ文学者として知られています。

『岬の墓』の詩では、以下のような情景が印象的に描かれています。

紺碧の空の下、きららに光る入り江に休む白い船。

影一つ無い真昼の丘に立つ白い墓。

丘の岩の間に咲く赤い花

そして、白い船には「別の大洋をめざして船出せよ」と未来への羽ばたきを願い、白い墓に対しては、その下に見いだした暗い影に「休らいのことばを語れ」と過去の魂に請い、赤い花になにをきかそうとすることによって、その印象的な情景が象徴化されています。

團伊玖磨は『岬の墓』の詩を以下のように解説をしています。

これは深い詩である。白い墓の下に仄暗く存在する過去、青くひろがる海 - 現在に漂う舟で象徴される我々自身、自己、そして、水平線の彼方に光る未来。人間の心の中にバランスを構成するこの四つの視点を骨格として、人生の姿を、永遠に解き難い人生の謎を、絶対の真理 - 赤い花 - に問いかけるこの詩は、制約された簡素な表現と、その深い内容によって、我々を厳しい内省と思索の世界に誘わずにいない。

この詩の湛えるものは、単なる抒情でも描写でもない。そういう枝葉の発するもっと内側のもの、枝や葉に対する幹の美しさと力強さがこの詩の本質であると思う。

それゆえに、團伊玖磨はこの詩の作曲を行なうにあたり、あらゆる表面上の装飾を排除し、骨格を重視した、簡潔な手法を執ったとも語っています。

『岬の墓』では冒頭部分をはじめとして、ハミングなどのヴォカリーズによって奏でられるモチーフが多用されています。團伊玖磨は、自身の他の楽曲に対して「ヴォカリーズは森羅万象をあらわす。自然が奏でる音にならない音楽をヴォカリーズで奏でる」と語っていたそうですが、この曲でもヴォカリーズが詩の背景となっている海や空、風のようなアトモスフィアとなって、この詩の背景イメージを広げ、さらに曲の中盤、白い墓にフォーカスが当てられた部分では、単なる情景描写にとどまることなく心象風景もがヴォカリーズによって描かれており、単なるバックコーラス的なヴォカリーズとは一線を画したものとなっています。

（甲和 伸樹）

Ⅲ.『明日へ続く道』

私は歌おう、可視光線のように進むべき道を指し示す希望の歌を。私は歌おう、木漏れ日のようにやさしく、傷ついた心をあたたかく包み込んでくれる歌を。

楽譜のまえがきに書かれた作曲家、千原英喜の言葉である。東日本大震災の被災地、津波で何もかもなくなった瓦礫の中の、枝も折れぼろぼろになった一本の桜の木に、薄紅色の花が咲いた。人々は一筋の希望の光りを見つけたように桜を囲んでいる。そんな情景から星野富弘の詩、「明日へ続く道」と「もう一度」が書かれた。これらの二編の詩は、平成24年度 NHK全国学校音楽コンクールの課題曲として千原英喜により作曲された。そしてこれに星野富弘の自伝的な詩による、「君影草」「悲しみの意味」の二曲が加えられ、合唱組曲「明日へ続く道」となった。

1. 君影草

君影草はすずらんの別称。歌い出しの切れぎれのフレーズとカノンは、心に明滅する悲しみ、不安、焦燥感が表現されている。それに引き続き、様々な情景や感情が美しい旋律でしみじみと歌われる。

2. もう一度

やさしく温かな木漏れ日のような音楽。ピュアでストイック、静謐な情感はルネサンスの祈りの合唱曲がイメージされている。この曲は、本来は無伴奏で作曲されたが、後からピアノパートが書き加えられ、そこには心の推移や情景（波音、鳥のさえずり、羽ばたき、光彩）が見事に描かれている。

3. 悲しみの意味

ほどよくゆるやかなバラード風の小品。組曲の中では間奏曲の位置づけにある。さりげない中にも情熱と大きな感情の起伏をもってきびきびと歌われる。

4. 明日へ続く道

ダイナミックで力強い音楽。海の彼方、水平線から太陽が昇る。心の奥底から聞こえてくる歌声。その声に突き動かされるように運命を受け入れ、一步を踏み出し、明日への道を歩んでいこうと決意する。

（萩原 寛明）

Ⅳ.『柳河風俗詩』

もうし、もうし、柳河じゃ、柳河じゃ ではじまる「柳河」は、男声合唱団に入団した最初の頃に、まず必ず音にする曲ではないでしょうか。男声合唱のバイブル的曲であり、多田武彦先生のデビュー作でありながら、タダタケ作品が無くては男声合唱の演奏会が成立しないというタダタケ作品の広がりをも十分に予想させるすばらしい組曲でもあります。音楽的にも非常に魅力的なものになっています。詩は、北原白秋の「思ひ出」より、柳河・紺屋のおろく・かきつばた・梅雨の晴れ間が選ばれています。「思ひ出」の序文に書かれている文章“私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。”は有名であり、この曲全体のイメージともなっています。

1. 柳河

銅（かね）の鳥居・欄干橋・遊女屋（ノスカイヤ）など三柱（みはしら）神社参道、遊女屋裏の縁台（バンコ）で母の形見の小手鞠を泣きながら巻いている継娘の描写、馭者の喇叭とともに廃市の情景が現れてきます。

（歌詩）もうし、もうし、柳河じゃ、柳河じゃ。

銅^{かね}の鳥居を見やしゃんせ。欄干橋をみやしゃんせ。

（馭者は喇叭^{らっぱ}の音をやめて、赤い夕日に手をかざす。）

薊^{あざみ}の生えた その家は、その家は、
舊^{ふる}いむかしの遊女屋。人も住はぬ遊女屋。

裏の BANKO に居る人は、……

あれは隣^{ままむすめ}の継娘。継娘。

水に映ったそのかげは、そのかげは
母の形見のこてまり小手鞆を、小手鞆を、
赤い毛糸でくるくのぢや、涙片手にくるくのぢや。
もうし、もうし、旅のひと、旅のひと。
あれ、あの三味をきかしやんせ。にぶ鳩の浮くのを見やしやんせ。
(馭者は喇叭の音をたてて、赤い夕日の街に入る。)
夕焼、小焼、明日天気になあれ。

2. 紺屋のおろく

“おろく”という名のおませな娘が筑前しぼりの着物を着て猫を抱いてしゃなしゃな歩いている。猫とあん畜生が真っ赤に染まった有明の夕日の美しさにひかれて渦に陥って死んでしまえばよい…ホンニと呟いてしまう。少年期の倒錯した心理描写を不協和音と協和音が錯綜するリズムミクな音楽で表現しています。

(歌詩) にくいあん畜生はこや紺屋のおろく、猫をかか擁へて夕日の浜を
知らぬ顔して、しゃなしゃなど。
にくいあん畜生は筑前しぼり、華奢な指さきこあを濃青に染めて、
金の指輪もちらちらと。
にくいあん畜生が薄情な眼つき、黒の前掛、毛けじゆす繻子か、セルか、
博多帯しめ、からころと。
にくいあん畜生と、擁へた猫と、赤い入日にふとつまされて
がた瀧にはま陥って死ねばよい。ホンニ、ホンニ、……

3. かきつばた

序文で“水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である”とも書かれています。水郷のながれに咲くかきつばた。

“夜は菱（しお）れて…泣きあかす…” 菱れるのは、かきつばただけではないようです。白秋の家でもあり、柳河の郷里でもあり・・・ゆったりとした流れに鳩（かいつぶり）が見え隠れする名曲です。

(歌詩) 柳河の 古きながれのかきつばた、
屋は ONGO の手にかをり、夜は菱しおれて
三味線の 細い吐息に泣きあかす。
(鳩けあつぶりのあたまに火ん点もいた、潜すんだと思うたらちい消えた。)

4. 梅雨の晴れ間

この季節、田舎の芝居小屋では旅役者による巡業シーズン。舞台になる二ラ畑にもまだ水がたまって
いるので、役者自ら水車を廻して、くみ出せくみ出せ・・・水車のリズムカルな動きと、役者・芝居小
屋・観客が共に楽しんでいる素朴でおおらかな柳河の情景が眼に浮かびます。

(歌詩) 廻せ、廻せ、水ぐるま、けふのひる午から忠信がただのぶ隈取紅いしゃっ面くまどりに
足どりかろく、手もかろく きつねろっぽう狐六法踏みゆかむ、花道の下、水ぐるま……
廻せ、廻せ、水ぐるま、雨に濡れたる古むしろ、まる円天井のその屋根に、
青い空透き、日光の 七宝のごときらきらと、化粧部屋にも笑ふなり。
廻せ、廻せ、水ぐるま、梅雨の晴れ間の一日を、せめて楽しく浮かれよと
廻り舞台も滑るなり、水を汲み出せ、その下の 葱の畑のたまり水。
廻せ、廻せ、水ぐるま、だんだら幕の黒と赤、すこしかかげて なつかしく
旅の女形おやまもさし覗く、水を汲み出せ、平土間ひらどまの、田舎芝居の菰畑。
廻せ、廻せ、水ぐるま、はやも午から忠信が紅隈とったしゃっ面
足どりかろく、手もかろく、狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……

(本城 正博)

～ プロフィール ～

ほんじょう まさひろ

本 城 正 博 (客演指揮者)

大阪大学男声合唱団指揮者をへて現在パナソニック合唱団常任指揮者。発声法を櫻井吉明、福島慶子、小玉晃、田中由也、山下文裕の各氏、指揮法を櫻井吉明氏に師事。ブスト、パミントウアン、サボー、コチャール、本山秀毅、信長貴富、松下耕、藤井宏樹、佐藤賢太郎、千原英喜の各氏より合唱指揮の指導を受けるとともに交流を深める。全日本合唱コンクール全国大会にパナソニック合唱団を率い20回の金賞を受賞する。最近では、中国・ニューヨーク・トロサ公演などの海外演奏、合同演奏等の客演指揮や審査員としても活躍するとともに、委嘱作品初演やCDリリース、若い世代との交流に積極的に取り組んでいる。JCDA日本合唱指揮者協会会員。21世紀の合唱を考える会 合唱人集団「音楽樹」会員。関西学生混声合唱連盟顧問。大阪府合唱連盟理事。パナソニック株式会社勤務。

はぎわら ひろあき

萩 原 寛 明 (指揮者・ヴォイストレーナー)

京都市立芸術大学音楽学部声楽専攻卒業、同大学院修士課程修了。ウィーン国立音楽大学卒業。ウィーンではアーノルト・シェーンベルク合唱団に所属、ヨーロッパ各地において世界的な著名指揮者らのもと多数の演奏会や録音等に参加。現在は、関西二期会に所属し、オペラ公演や、第九、宗教曲等の演奏会にソリストとして多数出演、また合唱指揮者やヴォイストレーナーとしても活躍している。関西二期会、日本シューベルト協会、西宮音楽協会各会員。神戸女学院大学音楽学部、兵庫県立西宮高等学校音楽科各講師。

こうわ のぶき

甲 和 伸 樹 (東京支部 指揮者)

1977年大阪大学入学と同時に大阪大学男声合唱団に入団。当時の技術顧問であった故櫻井吉明が開設した「合唱基礎教室」に入門。ベースのパートリーダー及び技術委員長を務める。1981年櫻井吉明が率いるコードリベット・コールに入団し、のちにパートトレーナー。1982～84年大阪男声合唱団にて副指揮者。東京での就職によって一時期合唱から離れるが、1996年から合唱活動を再開し、2001年2月、大阪男声東京支部結成と同時に練習指導に携わり、定期演奏会及び、支部単独ステージ、ジョイントコンサートの合同演奏などで指揮者を努める。現居住地の近隣でも合唱メンバー及び運営スタッフとして活動し、現在は松戸市民コンサート実行副委員長及び合唱団インスペクタを務める。

さかた ゆうじ

坂 田 裕 二 (指揮者)

1979年、大阪大学男声合唱団入団、故 櫻井吉明氏の指導を受ける。1983年、櫻井氏の主宰する混声合唱団コードリベット・コール入団。同氏が病に倒れて後、延原武春、畑 儀文、中村勢津子(発声)各氏の指導を受け、練習を担当すると共に、教会等の演奏会で宗教合唱曲を指揮する。現在、コードリベット・コール団内指揮者、大阪男声合唱団指揮者。

さかた ゆりこ

坂 田 百合子 (東京支部 ピアニスト)

山陽女子高等学校音楽科を経て、国立音楽大学音楽学部器楽科ピアノ専攻を卒業。イタリアローマ、フィレンツェにおけるオペラ歌手故ジュリオ、バルデイ夫妻の伴奏に同行するなど声楽・合唱の伴奏や弦楽室内楽とのアンサンブルを数多く手がけている。さらに現在はピアノ演奏以外に、千葉県下の合唱団の指導者をつとめるなど、地域コミュニティーへの貢献も幅広く行っている。これまでにピアノ、室内楽、伴奏法を高市貴久枝、岩崎淑、賀集裕子、チェンバロを新谷久子の各氏に師事。大阪男声合唱団東京支部とは約10年前より通常練習や東京での演奏にかかわり、東京支部活性化の一翼を担っている。

たけち ともこ

武 知 朋 子 (ピアニスト)

京都市立堀川音楽高校、京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。ミュンヘンにてM・シュリューター、カールスルーエにてW・ヤーンの室内楽マスターコース修了。その他ミラノ、ウィーンにおいても研鑽。1995年友愛ドイツ歌曲コンクールにおいて最優秀伴奏者賞受賞。2003年トスティ歌曲国際コンクールにおいてトスティ・ピアノ賞受賞。第17回京都芸術祭において最優秀協演賞受賞。様々なジャンルの音楽家との共演、音楽コンクールにおいて伴奏、創作オペラのヨーロッパ公演などアンサンブルピアニストとして活動。

～ 出 演 者 ～

《大阪男声合唱団》

第1テノール		第2テノール		バリトン		バス
O 名迫 行康	T	北村 栄史	O	近藤 毅	T	待山 仁雄
O 岡田 伸太郎	O	子安 一男	T	大野 堯	O	中野 洋介
O 辻 輝夫	O	田村 坦之	T	藤山 進	O	服部 道彦
T 丸谷 隆一	O	細谷 正純	T	洲山 正樹	O	三瀬 高司
O 栗山 和郎	O	藤本 好司	O	田口 孝人	O	今村 陽一
T 高木 保	T	宇野 肇	T	福井 朗	O	江村 和朗
T 吉識 道明	T	富田 義人	O	榊田 征也	T	木戸 啓喜
T 上田 勝己	O	詠田 英夫	O	荒木 正雄	*	小早川 護
O 高山 裕二	T	国分 和夫	O	片桐 知之	*	馬頭 恒雄
* 佐藤 圭司	O	豊原 力	T	奥村 秀策	O	前川 治治
* 檜木 勘四郎	T	江守 茂和	O	橋本 達弥	T	山邊 直基
T 村田 洋一	*	廣瀬 俊博	O	山田 雅朗	*	太田 博文
* 寺尾 敏康	*	山田 明	*	池田 直昭	*	高島 志信
* 松本 浩昭	O	久米 勝彦			*	渡邊 史信
* 花田 武司	T	本間 真人			O	佐々木 泰介
O 内田 裕樹	T	岡部 寛正			T	鈴木 啓司
					T	甲和 伸樹
O 大阪メンバー					O	坂田 裕二
T 東京メンバー					*	大江 謙二
* 賛助出演メンバー					*	中屋 祐紀

《大阪外国語大学グリークラブOB合唱団》

～「柳河風俗詩」に賛助出演～

第1テノール	第2テノール	バリトン	バス
西村 信勝	若林 允	新出 武雄	大井 耐三
板村 哲也	西沢 毅彦	西川 哲朗	真鍋 一史
五十嵐 強	赤城 一字	浜崎 慎吾	南 雄次
保川 一治	杉本 啓一郎	岸本 保	樽井 一仁
戸田 貴之			
坂居 孝二			

【大阪男声合唱団】

1954年大阪大学男声合唱団のOB合唱団として発足、1959年までは毎年現役合唱団の定期演奏会の賛助出演や合唱祭に参加をしていましたが、その後は20年余り休眠状態になりました。1982年から活動を再開し、関西の4大学（大阪大学、京都大学、神戸大学、大阪市立大学）OB男声合唱団と東京大学OBの関西支部合唱団からなる「五つの男声合唱の集い」演奏会に毎年参加。1990年代の終わり頃から社会の現役を引退した初期のOB達が続々と戻って来て、2001年7月、大阪にて第1回定期演奏会を開催。それ以後は毎年定期演奏会を行ってきました。選曲はメンバー卒業当時の伝統であったドイツ男声合唱曲、清水脩、多田武彦などに始まり、鈴木憲夫、木下牧子、信長貴富などの邦人曲が多くなり、原語で歌うウィンナーワルツも得意なレパートリーになりました。2007年から5年間東京公演を実現しました。東京支部合唱団は2001年に関東在住のOBで結成、毎年大阪での定期演奏会に参加していましたが、2006年からは単独で「東京男声合唱フェスティバル」に出演しています。

【大阪外国語大学グリークラブOB合唱団】

大阪外国語大学グリークラブの誕生は89年前の1926年に遡ります。団員の減少から1998年に廃部となりましたが、同年東京で、そして2001年には大阪でOB合唱団が結成され、現在では大阪、名古屋、東京地区を合わせて50名を超える陣容となっています。数々の合唱曲を作曲した清水脩は在学中にグリークラブの指揮をした大先輩でもあり、清水脩の曲は我々にとって欠かせないものとなっています。最近では、2011年11月に、清水脩生誕100周年記念として、「月光とピエロ」「三つの俗歌」「日本民謡」を演奏したほか、2014年6月の「創部88年記念演奏会」や同年11月の大阪男声合唱団との合同演奏会でも「月光とピエロ」などを演奏しました。また、創部以来歌い続けている黒人霊歌も本団のレパートリーのひとつとなっています。来年には、大阪と東京で大阪外国語大学グリークラブ創部90周年記念演奏会を行う予定です。今回の演奏会では東京で活動しているメンバーが賛助出演します。

～ 昨年の演奏活動から ～



第14回大阪男声合唱団定期演奏会
2014年8月3日 @クレオ大阪中央(大阪)



Autumn Joint Concert
2014年11月2日 @文教学院大学 仁愛ホール(東京)
大阪外国語大学グリークラブOB合唱団
文教学院大学吹奏楽部
大阪男声合唱団